

桃のある風景

岡本かの子

青空文庫

食欲でもないし、情欲でもない。肉体的とも精神的とも分野をつき止めにくいあこがれが、低気圧の渦うずのように、自分の喉頭のどのうしろの辺あたりに鬱うつして来て、しつきりなしに自分に渴かわきを覚えさせた。私は娘で、東京端はすれの親の家の茶室ちゃしつ作りの中二階に住んでいた頃である。私は赤い帯を、こま結びにしたまま寝たり起きたりして、この不満が何処どこから来たものか、どうしたら癒いやされるかと、うつらうつら持て扱っていた。

人が、もしこれを性の欲望に関する変態のものだったろうと言うなら、或あるはそうかも知れないと答えよう。丁度ちやうど、年頃としごろもその説を当嵌あてはめるに妥当だとうである。しかし、私はそう答えながら、ものごとを片付けるなら一番あとにして下さいと頼たのむ。それほど私には、片付けられるまでの途中の肌質きめのこまかい悩なやましさが懐なつかしく大事なのだから。

母は単純に病気だということに決めてしまつて、私の変かわつた症しょう状じやうに興味を持って介か抱いした。「お欠餅かきもちを焼いて、熱い香煎こうせんのお湯へ入れてあげるから、それを食べてご覧よ。きつと、そこへしこつてる気持きもちがほごれるよ。」「沈ちん丁花ちやうげの花の干ほしたのをお風呂へ入れてあげるから入りなさい。そりやいい匂においで気が散さんじるから。」母は話さなかつたが、恐らく母が娘時代に罹かかつた気鬱症きうつしやうには、これ等が利きいたのであろう。

色、聞、香、味、触の五感覚の中で、母は意識しないが、特に嗅覚を中心に味覚と触覚に彼女の気鬱症は喘きを持つたらしいことが、私に勧める食餌の種類で判つた。私もそれを好まぬことはなかつた。しかし、一度にもつと渾然として而も純粹で爽かな充足を欲した。「もつと、とつぷりと浸かるような飲みものはなし？」「しとしとと、こう手で触れるような音曲が聴き度いなあ。」母は遂々、匙を投げた。

「男持ちの蝙蝠傘を出して下さい。」「草履を出して下さい。」「河を渡つて桃を見に行くから。」私は必ずしも、男性に餓えているというわけではなかつた。渡しを渡つた向岸の茶店の傍にはこの頃毎日のように街の中心から私を尋ねて来る途中、画架を立てて少時、河岸の写生をしている画学生がいる。この美少年は不良を銜っているが根が都会つ子のお人好しだった。

私は彼を後に夫にするほどだから、かなり好いてはいた。けれども、自分のその当時の欲求に照して、彼は一部分の対象でしかないのが、彼に対して憐れに気の毒であつた。

茶店の床几で鼠色羽二重の襦袢の襟をした粗い久留米緋の美少年の姿が、ちらりと動く。今日は彼は茶店の卓で酒を呑んでいるのだ。私は手を振つて、尾いて来ちやいないと合図すると、彼は笑つて素直に再び酒を呑み出した。私は堤を伝つて川上の方へ歩い

て行つた。

長い堤には人がいなくて、川普請の蛇籠を作る石だの竹だのが散らばっていた。私は寒いとも思わないのに岸に繋いである筏の傍には焚火が煙りを立てていた。すべてのものは濡れ色をしていた。白い煙さえも液体に見えて立騰っていた。

川上の上は一面に銀灰色の靄で閉じられて、その中から幅の広い水の流れがやや濁つて馳せ下っていた。堤の崩れに板の段を補つて、そこから桃畑に下りられるようになっている。私は、ここで見渡せる堤と丘陵の間の平地一面と、丘陵の裾三分の一ほどまで植え互してある桃林が今を盛りに咲き揃っている強烈な色彩にちよつと反感を持ちながら立ち止まった。だが、見つめていると、紅い一面の雲のような花の層に柔かい萌黄いろの桃の木の葉が人懐かしく浸潤み出ているのに気を取り做されて、蝙蝠傘をすぼめて桃林へ入つて行つた。

思い切つて桃花の中へ入つてしまえば、何もかも忘れた。一つの媚めた青白くも亦と色の神秘が、着物も皮膚も透して味覚に快い冷たさを与えた。その味覚を味う舌が身体中のどこに在るやら判らなかつたけれど味えた。「伝十郎」とまるで人間の名のように呼ばれるこれ等の桃の名を憶い出して可笑しくなつた。私は、あはあは声を立てて笑つた。

冷たいものがしきりなしに顔に当る。私は関わらずに、すぼめて逆さに立てた蝙蝠傘を支えにして、しゃがんで休む。傘の柄の両手の上に顎を安定させ、私は何かを静かに聴く。本能が、私をそうさせて何かを聴かせているらしい。桃林の在るところは、大体川砂の両岸に溢れた軽い地層である。雨で程よく湿度を帯びた砂に私の草履は裸足を乗せてしなやかに沈んで行く。「すと」「すと」花にたまった雨の滲の砂に滴る音を聴いていると夢まぼろしのように大きな美しい五感交融の世界がクツシヨンのように浮んで来て身辺をとり囲む。私の心はそこに沈み込んでしばらくとうとうとする。

こういう一種の恍惚感に浸って私はまた、茶店の美少年の前を手を振って通り、家の中二階へ戻る。私は自分が人と変っているのときどきは死に度くなった。しかし、こういう身の中の持ちものを、せめて文章でも仕末しないうちは死に切れないと思った。机の前で、よよと楽しく泣き濡れた。

後年、伊太利フローレンスで「花のサンタマリア寺」を見た。あらゆる色彩の大理石を蒐めて建てたこの寺院は、陽に当ると鉢物でありながら花の肌になる。寺でありながら花である。死にして生、そこに芳烈な匂いさえも感ぜられる。私は、心理の共感性作用を

基調にするこの歴史上の芸術の証明により、自分の特異性に普遍性を見出して、ほぼ生き
るに堪^たえると心を決した。

——人は悩^{なや}ましくとも芸術によつて救われよう——と。

青空文庫情報

底本：「愛よ、愛」パサージュ叢書、メタローグ

1999（平成11）年5月8日第1刷発行

底本の親本：「岡本かの子全集 第十四卷」冬樹社

1977（昭和52）年5月15日初版第1刷発行

初出：「文藝」

1937（昭和12）年4月号

※表題は底本では、「桃《もも》のある風景」となっています。

※「しつきりなし」「ほごれる」「喘《あえ》き」「しきりなし」「滲《しずく》」「仕末《しまつ》」の表記について、底本は、原文を尊重したとしています。

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2004年3月30日作成

2013年10月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

桃のある風景

岡本かの子

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>